エッセイ

付喪神（つくもがみ）——他者に思いを寄せる心

長岡千賀（追手門学院大学経営学部准教授）
Chika NAGAOKA

右下の図は京都大学附属図書館所蔵の貴重書の１つで『付喪神（つくもがみ）』というお伽草子に出てくる絵の一部である。道具に人のような顔や手足がついていて、その表情はどこかユーモラスに見える。見ていると、道具たちは何を話し合っているのだろうかとわくわくする。この絵は京都大学オリジナルグッズのクリアホルダーにも使われているほどだ。

ところが実際は決して穏やかなものではない。これは、捨てられた古道具たちが人間への復讐を企てている場面の絵なのである。『付喪神』のあらすじはこうである。

『陰陽雑記』という書物によれば、作られてから百年経った道具には魂が宿り、人の心を惑わすと申します。これが付喪神です。毎年新年になると、古い道具類を路地に捨てる煤払い（すすはらい）という行事がありますが、これは付喪神の災難に遭わないようにと行われるものなのです。

さて、康保の頃でしたでしょうか、例のように煤払いといって、洛中洛外の家々から、古道具が捨てられました。その古道具たちが一所に集まって話し合いをしています。「われわれは長年家々の家具となって、一生懸命ご奉公してきたというのに、恩賞がないどころか、道ばたに捨てられて牛や馬に蹴られなくてはならないとは、何と恨めしいことではないか。こうなったら妖怪になって仕返しをしてやろう。」何だか物騒な相談です。古道具たちはかなり興奮している様子。（以下省略）

（「挿絵とあらすじで楽しむお伽草子　第５話　付喪神」 http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/otogi/tsukumo/tsukumo.html）

このあと古道具たちはさまざまな姿の妖怪になり、京都の北郊の船岡山の後ろに住み、都に出ては悪さをして人々を苦しめる。ここまで読むと、役目を終えた道具たちに感謝を示すべきだ、あるいは、ものを大事にせよ、といった教訓のように見える。しかしこの話はそれだけではない。ここで注目したいのは、小道具が、まるで人と同じように心を持つ存在として描かれているところである。奉公心や恨みという高度な感情を持つ存在として、作者は古道具を描き、読み手も古道具たちに共感しながら読み進む。

この話にはこの他にも、妖怪に変化した古道具たちが優雅に和歌を嗜んだり、自分たちを変化させてくれた神を祭って——祭らなければ心のない木や石と同じではないかと言いながら——朝夕神事をおこなったりする場面さえある。さらには、古道具たちは御法童子の追討を受けたのちは改心して道心し、山奥に住む数珠の上人を訪ねる。この数珠は、妖怪に変化しようとしていた古道具たちを制止したがひどく打たれ、それをきっかけに出家して僧となっていた。古道具たちは「以前ひどい目に合わせてしまったが、心から懺悔すれば慈悲の心で許してくれ教えをいただけるはずだ」と信じてこのような行動をとるのである。

古道具に命や心を見出すことは、長い間健在であり続けたモノに対する日本人の畏怖や畏敬の念の表れと言える。しかしなぜ、古いものに畏怖、畏敬の念を持つのか。

そこには、私たちの心の働き、すなわち、モノを通して、今はここにいない他者に思いを寄せる働きが関係していると思われる。たとえば、古い建築物や道具に接したとき、私たちは、それを今までていねいに使い続けてきた使い手や、それが長持ちするように工夫して作った作り手のことを、自然と感じ取っているだろう。形見の品を大事にしようと思ったり、ある贈り物に「心がこもっている」と感じたりするのも、これと同様の心の働きによると言える。

今はここにいない昔の人を大切に思うからこそ、その人々の生活に密に関わってきたモノにも敬意を持つと考えられよう。そうすると、お伽草子『付喪神』は、他者を大切に思う心にあふれたお話とみることができるかもしれない。

人間への復讐を企てる古道具たち（京都大学附属図書館所蔵貴重書『付喪神』より）